

授業特別協力者(ゲストスピーカー)報告書

テーマ : 震災時の大川小学校と女川の中学校
授業特別協力者名 : 佐藤 敏郎 氏
実施日時 : 2021年6月4日(金)1時限
担当教員名 : 中村 亨
授業科目名 : ベーシック演習
実施場所 : オンライン Zoom
履修者数 : 15名

実施結果

東日本大震災が起こった当時、佐藤敏郎さんは女川の中学校で教員をされていました。3月11日に激しい揺れが起こったとき、佐藤さんは生徒たちと卒業式の準備をしている最中で、3月11日と12日は生徒たちと学校に泊まりました。避難所として生徒たちと津波から逃れてきた住民たちが寝泊まりするようになった中学校の震災当時の具体的な様子を、佐藤さんは説明してくださいました。

また佐藤さんの娘さんは震災があったとき石巻市の大川小学校に通われていました。佐藤さんは大勢の児童が命を失った大川小学校の出来事についても、学校から帰宅して出来事を知った驚きやそれに続く行動など個人の経験と、全体的な背景や経緯など客観的な事実を交えて語ってくださいました。

人口のほぼ一割にあたる人たちが亡くなった女川では、ほぼ誰もが家族や親せき、友人など身近な知り合いの誰かを失っており、中学校に通う生徒たちも例外ではありませんでした。目の前で津波に飲まれ流される人を、手を伸ばさなかったために見殺しにしてしまったと感じている生徒や、親友を亡くした生徒、生き残った自分は「何で生きているんだろう？」という思いを抱いている生徒も居たそうです。

そんな折、震災に直面した生徒たちの思いを俳句として発表し、国際宇宙ステーションに打ち上げて搭載するという企画が宇宙開発の関係者から女川の中学校に持ち込まれ、佐藤さんが担当していた国語の授業でその企画を実行することになりました。佐藤さんご自身は、その企画を聞かされて最初は躊躇したそうです。ところが教室で用紙を配ると生徒たちは皆真剣に、指折り数えて自分の気持ちを言い表す言葉を探し始めました。その場では何も書けず、家に持ち帰って後日提出した生徒も居たそうですが、生徒たちが提出した俳句はどれも真摯な気持ちを伝えるものでした。「ただいま聞きたい声が聞こえない」「あの人が帰ってきた夢を見た」といった句や、また中には「夢だけは壊せなかった大震災」「見上げればがれきの上にこいのぼり」といった逆境をはね返す決意や希望を感じさせる句もありました。

佐藤さんの講演は当事者の直接的な経験をお聞きする貴重な機会となり、現在は震災後というより、次の震災が来るまでの間の期間、「災間」であり、その間に震災に備えることが大事だという言葉は説得力がありました。

質疑応答では一つ一つの質問に丁寧に答えてくださり、「震災の後、授業に臨む心持で震災前と変わったことはあるか」という質問に対して、震災の前は目の前にいるのは「生徒」としか思っていなかったが、震災の後には一人一人が「命」だと実感するようになった、「命」がリュックを背負って教室にやって来る、と答えられていたのが特に印象的でした。